北欧の図書館ネットワーク

オスロ大学人文社会学図書館 マグヌスセン 矢部 直美

情報管理 54(12), 848-852, doi: 10.1241/johokanri.54.848 (<http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.54.848>)

1. はじめに

ノルウェー国内における専門図書館、公共図書館の枠を超えたネットワークについては2011年7月号(54巻4号)の全国共通貸出カードの紹介の際に述べたが、これ以外にも日常業務で頻繁に利用される図書館間の協力体制は色々ある。今回は、こういった図書館間ネットワークが、国内のみでなく、スカンジナビアやその外の国々とも盛んに行われていることを述べることにする。

2. スカンジナビアとその近辺のネットワーク：
ILL

北欧では、図書館活動に限らずすべての社会活動で隣国間との協力体制が整っている。殊に、ノルウェー、スウェーデン、デンマークの3国は地理的に隣接しており、文化や言語・歴史も関係が深い。ILL(図書館間相互貸借)ではこの3国間を密接に結ぶ図書館間流通ルートができており、図書の行き来は頻繁である。ひとつにはNBT^{注1)}という図書館専門流通業者がスウェーデンのマルメを3国の結び目とし、本を梱包することなく専用のケースに入れて配送するシステムを提供していることが大きい。各図書館は他館から注文のあった本に貸出先の図書館番号を示し、専用ケースに入れておけば業者が毎日収集に来る。例えば、ノルウェーのオスロ大学の学生は、オスロ図書館にない本がデンマークの王立図書館にあった

場合、この本をオスロ大学図書館を通じて無料で借りることが可能だ。学生や研究者なら所属機関の付属図書館を通し、その他の一般利用者は、公共図書館を通じてこれらの本を北欧圏内なら無料で借り入れることができる^{注2)}。

北欧間の連携が密であることの一番の理由は、各国規模がイギリス、フランス、ドイツといった欧州大国に比べ小さいため、それに対応するのに国境を超えた協力が必要不可欠だという認識があるためだ。第二次大戦後に設立された北欧理事会(Nordic Council)^{注3)}は、戦時下に各国が十分な協力体制を持っていなかったために苦しい思いをした経験を反省して作られたということである。北欧の国と言った場合上に述べた3国に加え、フィンランド、アイスランド、フェロー諸島等も含まれる。

私の勤務先のオスロ大学図書館のILL部門によると、デンマーク、スウェーデン^{注4)}間との借り入れが一番多い。ノルウェーに比べこの2国は規模が大きく、殊に専門図書になるとノルウェーにないものがこの2国の図書館にあることが多く、かつ流通もよいので届くのが速く、職員のみならず学生も無料で利用することが理由である。また、スラヴ学関係の図書では、フィンランドへの注文が多い。フィンランドが歴史的に旧ソ連邦に深くつながっていたため、その関係の所蔵蓄積が豊富なことによる。90年代に独立したバルト三国、エストニア・リトアニア・ラトビアも地理的に近く、独立以来北欧ネットワークに加わり、図書館界においてもこれらの国との図書の往来は盛

んである。

なお、当館では雑誌記事に関してはドイツのシステムsubito¹⁾が迅速で経済的なサービスを提供しているため、subitoで入手できる雑誌記事は北欧よりもこれを通して注文しているとのことである。

3. 北欧のアジア学およびその図書館の背景

各国の規模が小さい北欧だが、そのなかでさらに小規模ながらアジア学の研究、授業が行われている。私は図書館側からそれに関わっているわけだが、専門図書館として苦勞することは、予算が限られているため必要な図書を十分に供給しきれない点にある。英文・欧文の資料は利用者数も比較的多いので購入が優先されるが、原語で書かれた図書は蔵書数に限りがあり、他の学術図書館との協力なしでは必要図書の供給が不可能である。往々にして北欧圏内でも入手不可能なことが多く、他の欧州諸国の学術図書館、あるいは北米・日本の図書館にも頼ることとなる。幸い現在は国際的にOCLC²⁾や日本の国立国会図書館によるILLシステムがよく機能しているので大変助かっている。

大学内でアジア関係の授業や研究がなされていても、大学全体の活動規模から見ればそれはごく限られた規模のため、付属図書館にアジア言語に対応できる図書館員のいない所が多いのが実情だ。そのため図書館からのサポートが不十分になりがちである。例えば、現在ノルウェー国内で日本関係の授業を行っているのは、オスロ大学以外にベルゲン大学、トロンハイム工科大学があるが、日本語に対応できるのは私の勤務先であるオスロ大学図書館のみである。私自身オスロに所属していても、ある程度のサポートをベルゲンやトロンハイムの研究者に提供しているが、限界がある。研究者は、日本語図書を自分でネット書店から直接購入するなど対応しているが^{注5)}、日本語データベースのアクセス、雑誌記事の注文に関しては難しい点が出てくる。日本語を含め、

アジア言語利用者が少ないため、各大学が有料データベースへのアクセスを可能にするためのコンソーシアムも1国で成り立たせることはできない。これは、スウェーデン、デンマーク、フィンランド等でも同じ状況である。

その一方で、国際社会情勢を考えると、経済をはじめとしたアジア方面での発展が今後も活発であり続けることは明白である。それに対応するためにも研究者やアジア関係の仕事に従事している人たちの間では、今後北欧でのアジア学の充実が、大学の社会的役割からも必須であるという認識が強まっている^{注6)}。

4. 北欧アジア学ネットワーク：NIAS

幸いNordic Institute of Asian Studies (NIAS)³⁾という組織がある。これは、先のILLの項で述べた北欧理事会により1968年に設立された北欧アジア学支援のための組織である。現在はコペンハーゲン大学を中心として、北欧各国のアジア学のある大学やアジアに関わりのある研究機関がメンバーとなり、運営にあたっている。

NIASには図書館部門NIAS Linc (NIAS Library and Information Center)⁴⁾がある。ここで提供するWebサイトAsiaPortal⁵⁾(図1)を通じ、北欧のアジア学情報を発信するとともに、メンバー機関に有料データベースを含めたアジアに関する情報を提供しており、学術関係者だけでなくジャーナリストも情報提供、利用している。メンバー組織図書館がその機関所属コンピューターのIPナンバーをNIAS Lincに登録しておけば有料データベースも利用可能である。しかし各図書館側でアジア学対応の認識が低いと、機関PCのIPナンバーをNIAS Lincに登録するといった手続きすら進まず、研究者や学生への適切な情報提供が難しいこともままある。NIASは北欧理事会やメンバー機関の登録料で運営されており、有料データベースもこの予算から賄われている。オスロ大学もメンバーとしての登録料を支払っているため、これらの利用

図1 NIAS LincによるAsiaPortal Webサイト

が可能だ。現在日本語有料データベースはCiNiiをはじめ6種類が利用可能である。近年はNIAS Lincに対し日本の国際交流基金から助成を頂き、これも北欧の日本語データベースの提供に大きく貢献している。

北欧全体で日本語データベースを使いこなせる利用者数は100人に満たないと概算されるが、今後、利用者数が減るとは考えがたい。一方でさらに各種データベース数が増えていくと考えられる。データベースを国境を超えて北欧単位で利用するにあたり、現在複数の日本提供者にはその点を理解し考慮していただいている。しかしこの状況が十分理解されず、交渉が難航する場合もある。現在、利用したいデータベースすべてが網羅されているわけではない。データベースは価格も大変高く毎年の利用料金が必要であり、北欧では1図書館どころか1国でも対応しきれない。NIAS Lincがなかったら、日本語データベース利用は北欧研究機関では不可能だろう。NIAS Lincにより提供されている有料データベースは、現在日本語データベースに加え、中国語有料データベースも10種類ほどある。今後有料データベースの必要性は

ますます増えるものと考えられ、経済的な限界に今後どうやって対応するかが検討されているが、解決は容易ではない。

5. 欧州日本関係学資料ネットワーク：EAJRS

アジア学図書館のネットワークとしては、欧州の日本資料専門家欧州協会 EAJRS (European Association of Japanese Resource Specialists)⁶⁾、中国学図書館員のEASL (European Association of Sinological Librarians)⁷⁾、南アジア図書館のSEALG (Southeast Asia Library Group)⁸⁾もある。それぞれ欧州のアジア学の中でもさらに分野を絞った集まりであるが、1人で複数に関わっているケースもある。私の場合は日本学資料のEAJRSの年次会議に参加している(図2)。イギリスやフランスでは、国内でも日本学関係図書館グループがあり活動しているが、北欧全体でもグループを作るほど人がいないため、欧州のこの会議が有益である。欧州内の学術図書館の動向を知ることはもとより、日本からの参加者による図

図2 EAJRS Webサイト 2011年会議プログラム

書館関係の情報や新たなデータベースの情報を得たり、北米や他の地域からの参加もあるので、日本学関係図書館としての重要な情報源で、日常業務上も大変有益である。北欧のアジア学図書館業務は、それだけを専門とすることは難しく、さまざまな他の一般図書館業務にも携わることが多い。日常アジア学のことに十分に時間をかけられないため、こういった会合で年に1度でもまとまって情報アップデートの機会があることがまさに命綱となっているといえる。

6. さらなるネットワークの構築

ノルウェー国内の学術図書館システムBIBSYS⁹⁾はOCLCと契約を結び、2011年より次世代の図書館システムの開発に取り掛かっている。この新システムは実行が2013年中と予定されているが、これが本格的に動き出すと、さらに図書館間のネットワークが広がることは間違いなからう。OCLCは北米で始まったが、今や欧州、アジア、オセアニアの多くの国立図書館や学術図書館が参加しており、書誌情報の共有やILLもますます盛んになるだろう。日本からも国会

図書館に加え複数の図書館が参加しているので、現在のシステムで不可能な日本図書の正確な書誌情報に素早くアクセスできるようになることを期待している。

図書館をとりまく状況を考えると、今後人件費の削減傾向は変わりそうにない。利用者が自分で検索し、資料を見つけるための条件を整えるシステムの開発はさらに進められる。しかし、図書館利用者に確実に適切な資料を提供していく面での対応は、直接の対応であっても、ネットを通しての対応であっても、人間が関わる必要がまだまだある。目まぐるしい勢いで発展する情報を正確につかみ対応するには、他の図書館や専門家との密な協力がますます必要であると考えられる。殊に資源、人源の限られた北欧でアジア学を支援する図書館はそれなくしては十分な資料提供は不可能だ。

今回紹介した北欧での国を超えたネットワークは、小規模国の限界をカバーするのに大きく役立っている。こういった図書館間の国を超えての協力体制が、他の小規模言語の地域でも行われているかどうかは、残念ながら不勉強のため私は把握していない^{注7)}。今後ますます人材削減、予算削減を強いられる傾向の

強い図書館界において、殊に規模の小さい国や財源の限られている図書館が質の確かな情報を提供して

いくためには、国境をも超えた地域での図書館間ネットワークが必然と思われる。

本文の注

- 注1) NBT (<http://www.nbt.as/>) はこの3国間だけでなくそれ以外の国との図書配送にも関わっている。NBT以外にも図書館の利用する流通業者はあるが、現時点では最大で効率性が高いとされている。
- 注2) オスロ市内の一般利用者は、公共図書館であるダイクマン図書館を通じ、北欧圏内の専門図書館、公共図書館からの借り入れが無料で可能。これら以外の国からの借り入れは、国立図書館を窓口とするがこれは有料となる。
- 注3) 北欧理事会 (<http://www.norden.org/en>) は、政治や行政の各分野にわたり北欧間の密接な協力体制を支える基盤となっている。これらの国の間では、人や物の流通がほぼ自国内と同じように可能である。例えば、スウェーデン人がノルウェーで働く場合、ビザ等の書類を特に必要としない。
- 注4) スウェーデンとデンマークでは、それぞれLIBRIS (<http://libris.kb.se/>) , bibliotek.dk (<http://bibliotek.dk/>) という専門図書館・公共図書館の横断検索システムがあり、Web上で直接ILLの手続きをすることが可能である。ノルウェーではそれに該当するものがない。
- 注5) 大学の研究費を使って購入しても図書館資料として登録はされないため、この資料を広く共有し有効活用することができない点では、日本語図書蔵書の限られている図書館として残念である。
- 注6) 2011年12月オスロ大学で開かれた学会NORASIA IVはノルウェーのアジア学研究者学生のネットワーク Asia-nettverket (<http://www.asianettverket.no/url/forsiden/>) の主催で、北欧を中心に多くの参加者があったが、ここでもアジアに対する対応の遅れ、アジア学の必要性が繰り返し述べられた。
- 注7) 北米では、CEAL (<http://www.eastasianlib.org/>) , NCC (<http://guides.nccjapan.org/homepage>) 等東アジア図書館ネットワークが広く活発に活動している。

参考文献

- 1) subito. <http://www.subito-doc.de/index.php?lang=en>, (accessed 2011-01-24).
- 2) "OCLC Global Gateway". OCLC. <http://www.oclc.org/global/default.htm>, (accessed 2011-01-24).
- 3) Nordic Institute of Asian Studies. <http://nias.ku.dk/>, (accessed 2011-01-24).
- 4) NIAS Library and Information Center. <http://www.niaslinc.dk/>, (accessed 2011-01-24).
- 5) AsiaPortal. <http://www.asiaportal.info/>, (accessed 2011-01-24).
- 6) European Association of Japanese Resource Specialists. <http://ejars.net/>, (accessed 2011-01-24).
- 7) European Association of Sinological Librarians. <http://www.easl.org/>, (accessed 2011-01-24).
- 8) Southeast Asia Library Group. <http://www.sealg.org/>, (accessed 2011-01-24).
- 9) BIBSYS. <http://www.bibsys.no/english/pages/index.php>, (accessed 2011-01-24).